

未公開資料の鉄道唱歌を基軸とした地方都市の地域活性化に向けた検討
～『烏寶線鉄道唱歌』の解明と近代後期以降の地域様態の把握を中心として～

足利工業大学工学部 学生員○布施 和也
足利工業大学工学部 正会員 福島 二郎
栃木県立烏山高等学校教諭 藤井 啓太

1. はじめに

現在、わが国では、地方都市の衰退が大きな課題となっており、その対応とすべく手法の構築に向けた取組みが各地で行われている。特に、人口流出に伴う財政基盤の脆弱さが顕著な地方中小都市では、大きな資金投入に依存せず、地域資源の活用による交流機会の拡大を目途とした取組みが定着しつつある。一方、恒常的な鉄道ファンの存在を踏まえ、鉄道を活用した地域活性化への取組みも各地で見られ、注目に値する取組みの一つと言える。本研究では、昭和初期の鉄道唱歌に関する発掘資料を基軸に、地方都市の地域活性化に向けた手法検討を目的とする。本稿では、その現状報告として、発掘資料『烏寶線鉄道唱歌』の解明、同唱歌が制作されたとされる昭和5年当時の当該地域の地域様態の復元、近代後期以降における変容過程の概略分析とともに、今後の研究展望を行う。

2. わが国の鉄道唱歌の概要と『烏寶線鉄道唱歌』

鉄道唱歌は、国文学者として著名な大和田建樹が作詞し、大阪・三木書店店主の三木佐助が明治33年に発行した『地理教育鉄道唱歌第一集・東海道編』がその嚆矢とされる。この唱歌はシリーズ化され第五集まで発行される等爆発的な人気を博し、その後、昭和戦前期にかけて地方路線でも多くの鉄道唱歌が作られた。本研究で取り上げた『烏寶線鉄道唱歌』もこのような背景の中で作られた一つであると思われる。“烏寶線”とは、大正12年に開通した烏山線（現在の東北本線の前身・日本鉄道の宝積寺駅から分岐して烏山駅

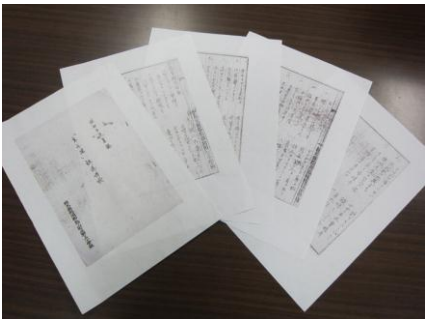


図1 『烏寶線鉄道唱歌』原本のコピー

までの路線。）であり、『烏寶線鉄道唱歌』はこの路線の鉄道唱歌である。この『烏寶線鉄道唱歌』は、市内在住の知人が所有していたものであるが、知人の入手経緯は不明で、且つその後知人が逝去されたことにより追跡調査は困難である。本研究に際し『烏寶線鉄道唱歌』自体に係わる調査を行っているが、現在までのところ作者の存在をはじめ唱歌そのものの情報等、全て不明である。図1に、便箋に記された『烏寶線鉄道唱歌』のコピーを示す。

3. 『烏寶線鉄道唱歌』の全文の解明

『烏寶線鉄道唱歌』の原本には、タイトル・歌詞とともに“及川誠二作歌”および“昭和5年集録”と記載してある。現在手元にあるのは、知人からの相談の折に頂戴した原本のコピーのみである。原本自体かなり古く、且つ手書きで記されたものであり、さらに現在は使用されていない地名や複写の際の文字の擦れ等が加わり、判読できない部分が多々あった。本研究では、市の文化財関係者や古老へのヒアリング、さらに現地および文献調査を進める中で、その全文を概ね特定することができた。表1に、『烏寶線鉄道唱歌』の全文を示す。

表1 『烏寶線鉄道唱歌』の歌詞の全文

1	ゆくてはいづこ寶積寺 希望を地史の上にして 春の一日ののどけさを 求めし今日のうれしさよ	2	窓にもたれて朝風を 愛づる折りしも一聲の 汽笛と共に吾が汽車は 烏山をば出でにけり
3	愛宕の山の峯つゞき めぐると見れば虻塚の 宿もいつしかあとに見て 峠を走る心地よさ	4	麦の緑のそが中に 黄金歟く花ありて 言はずとかなる春の香に 思はず胸の踊るなり
5	瀑音高く緑陰に 響くはこれぞ名に負ふ 瀧の名所と相待ちて 観音堂のあるところ	6	石のきざしは苔むして 慈覚大師開山の 堂宇をめぐる老杉は 雲を掃ふにさもこたり
7	汽笛一聲トンネルに 我等が汽車は入りにけり 此處難工の一ところ 延長實に三町餘	8	森田にきこえぬ発電所 小塙をすぎて荒川の 流れにわたす鐵橋に かゝれば音のかまびすし
9	かなたに見ゆる山脈の ふもとにひける一筆の 斜めに染めしうすかすみ 高瀬の景の得がたしや	10	いつしか大里あとにして 鎮守ふりむくひまもなく 大金驛につきにけり 驛夫のこゑもほがらかに
11	化石に名ある小河原や 人に知られし十二口 大和久小倉ほど近し 汽車は驛をばいでにけり	12	田の倉校や安楽寺 窓下に青き荒川を 再び右にながめつゝ すぐれば変る峯の松
13	繪にさながらの枝ぶりを 寫眞機に入るゝ者のあり 墨客何ぞ意なからん 詩人はすてじこしの峯	14	福岡すぎて鴻の山 長者平は遠けれど 今猶残る馬屋窪 八幡太郎に知られけり
15	窓より近き法康寺 一向宗にぞしられぬ 臺新田の三箇寺は 日蓮宗の古伽藍	16	太田神社を右に見て 左に仰ぐ星の宮 文挾校の庭先を すぐれば早やも熟田驛
17	汽車は煙を吐きたてゝ 今ぞ熟田をいでゝ行く 高根沢また花岡は 野州来てふ名も高し	18	廣義幾重灌漑の 水路蜘蛛手に分れつゝ さすがは廣き水田に 耕すものはこゝかしこ
19	花岡校や地藏寺を すぎて石末寶積寺 猪湖送電の架空線 鐵轡ならべる一奇觀	20	まもなく来る寶積寺 東北線と交りて 昇降客の多ければ プラットホームは織る如し

キーワード：鉄道唱歌，地域資源，地方都市，地域活性化，影響分析

連絡先：〒326-8558 栃木県足利市大前町 268-1 足利工業大学工学部 tel.0284-22-5687

4.『烏寶線鉄道唱歌』の分析

(1) 唱歌が集録されたとされる昭和5年の地域資源の抽出

特定した『烏寶線鉄道唱歌』は20番までの歌詞で構成されている。この歌詞を基に、唱歌が集録された昭和5年当時における地域様態の把握を目的として、現在のJR烏山線の全線を踏破した。現地踏査は、以下の手順により実施した。①特定した『烏寶線鉄道唱歌』の全文から、固有名詞をすべて抽出する。②その固有名詞について、区分・分類・諸元・形式等を整理する。③文献調査を並行して進め、古写真や史資料を整理する。④写真撮影により現況把握を行う。⑤現地でのヒアリングを並行して行う。手順に則り、現地踏査のための準備として固有名詞をすべてピックアップした。次に、抽出された59の固有名詞個々のワークシートを作成し踏査しながらまとめた。その結果、昭和5年当時の地域資源として33件が確認できた。この33件の地域資源を分類した結果、①自然・自然景観：12件36.4%、②歴史・歴史的景観：13件39.4%、③建造物（教育）：3件9.1%、④建造物（交通・通信・土木）：4件12.1%、⑤建造物（産業）1件3.0%となり、①と②の合計は全体の約76%を占めた。

(2) 昭和5年当時の“風光復元スケッチ”の制作

『烏寶線鉄道唱歌』の歌詞は、文語体の七五調を基本にした韻律で格調高く構成されている。建造物等の当時の形態の確認を踏まえ、昭和5年当時の風景を復元した。この復元にあたり、歌詞全文について意味の確認を兼ねて“読下し文”を作成した。この“読下し文”を基に、イメージ画の制作をイラストレーターに依頼した。その際、①建造物は当時の写真を利用し、②自然・風景についてはイラストレーターがイメージするところに従い描いてもらうこととした。図2に、その一例を示す。



図2 風光復元スケッチの一例

(3) 地域の変容過程の概略分析

近代後期以降における地域の変容過程の分析として、①市街地整備に伴う地域景観の変容、②土地利用の推移、③小学校と児童数の推移、④近代化としての電力事業、⑤地域産業の趨勢等について分析を進めている。現状報告として、①および②について述べる。当該地域における街路事業は、旧烏山町直轄事業として2箇所（昭和20年代後半～昭和40年代）、栃木県による事業が2箇所（昭和40年代～現在）実施されている。旧烏山町および民間事業として土地区画整理事業や宅地開発事業が行われ、そのうち泉土地区画整理事業では、区画整理地区内の80%を占めていた畑地が道路等の公共用地および市街地として整備されている。表2に、当該地域における土地利用面積の推移を示す。地域を構成する那須烏山市および高根沢町とも、昭和30年と平成22年の比較において、宅地の割合が増大するとともに農地の割合が大きく減少していることがわかる。これらを踏まえ、図2に示した昭和5年当時の豊かな自然景観も、徐々に失われていったものと考えられる。

5. まとめ

本研究では、未公開資料となる『烏寶線鉄道唱歌』の分析をとおして、地方都市の

地域活性化の手法検討を目的としている。本稿では、『烏寶線鉄道唱歌』の全文解明と昭和5年当時の風光復元を行う過程において、当時における当該地域の地域資源を抽出した。また、近代後期以降の地域変容の現状報告として自然景観の喪失要因について類推した。各地で行われている鉄道を活用した地域振興方策は、国の指定や登録等の所謂文化財を活用した取組みが潮流であり、本研究の鉄道唱歌はこれまでにない視点である。今後は、本稿で確認した昭和戦前期の地域資源と現在の地域資源の特定を踏まえた活用手法の検討を行うとともに、また、地域様態の変容過程に関する分析を進める中でヒストリーツーリズム構築の資料として検討したいと考えている。

表2 土地利用面積の推移（上段：面積km²，下段：全地積に占める割合%）

		昭和30年	昭和35年	昭和45年	昭和55年	平成2年	平成12年	平成22年
那須烏山市	総地籍	124.63	120.70	172.68	172.68	172.68	172.68	172.68
	田	18.53	18.09	19.92	22.33	27.01	26.95	15.43
		14	15	12	13	15	15	8
	畑	26.29	25.79	25.06	21.17	16.95	16.61	9.59
		21	21	14	12	10	9.6	5.5
	宅地	4.42	4.42	4.60	6.10	7.89	8.97	8.97
高根沢町		3.5	3.6	2.6	3.5	5.5	5.1	5.1
	総地積	62.06	60.36	71.09	71.09	71.09	71.09	71.09
	田	36.07	35.34	37.10	39.09	38.16	36.83	36.54
		58	59	52	55	54	52	51
	畑	10.65	10.05	8.58	5.31	4.63	4.14	4.00
		17	17	12	7	7	6	5
	宅地	2.94	2.95	3.59	4.74	6.13	7.21	7.81
		4.7	5	5	7	9	10	11

（「栃木県統計年鑑」昭和32年3月、36年3月。昭和45、55、平成2、12、22年度版を基に作成）